

小峰城よもや話

第八話
三重櫓と「天守」

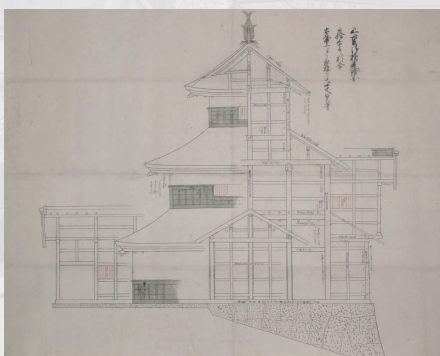
今回は、小峰城の象徴である三重櫓についてお話しします。

現在の三重櫓は、文化5年（1808）の「白河城御櫓絵図」に基づき、平成初期に木造で復元されました。お城の中心に配置された多層の櫓を「天守」と呼ぶ場合がありますが、この絵図では「三重（御）櫓」と記されています。この違いは何でしょうか。

江戸時代初期に「武家諸法度」が定められると、大名は城の新築や増築を原則禁じられ、修理にも届け出を義務付けられました。法度には、天守の築造について具体的な定めはありませんが、この頃には四層、五層の天守を建てる城はなくなり、二層か三層の櫓を配置し「二階櫓」「三重櫓」などと呼ぶことが一般的になりました。多層櫓と「天守」の間に厳密な違いがあったわけではなく、築城を厳しく統制する幕府の意向を汲んだ諸大名が「天守」の名称を用いず「櫓」として扱ったというのが実情のようです。

例外として、徳川家の城である江戸城や大坂城などでは五層の壮麗な天守が置かれました。小峰城の場合、初代藩主丹羽長重より前、慶長年間（1596～1615）の絵図には、すでに

に三層の櫓が描かれていました。長重はその形を引き継いで城の修築を行ったと考えられます。そして「御櫓絵図」にあるように、この櫓は「天守」ではなく「三重櫓」と呼ばれました。小峰城の三重櫓は倉庫として使われたという江戸時代の記録があります。三重櫓は、不便な高台にあり、間取りも居住や執務に適していません。三重櫓は、当時から実用の施設ではなく、外から眺められることに主眼を置いた建物であったといえます。現代よりも建物が低い江戸時代にはなおさら、城の威容を広く知らしめる象徴として機能していたと考えられます。



▲白河城御櫓絵図より「三重御櫓建絵図」
(市歴史民俗資料館蔵)

文化財課 ☎2310

白河、あの頃と今

今月のテーマ「南湖」

Vol. 3



市内の様子や行事などを写した古写真の中から、テーマに沿った1枚を紹介し、現在の様子と比較します。タイムスリップ気分を味わいながら、白河の魅力を再発見しませんか？ 本庁舎秘書広報課 内2171



【昭和62年の様子】

「じゅんさい」を収穫する様子です。食用の水草の一種で、5月から8月頃にかけて収穫されます。当時は南湖一面に生育しており、だんごに並ぶ南湖の名物として、多くの人に愛されていました。



【現在の様子】

環境が変化し「じゅんさい」の姿は見られなくなりましたが、南湖の美しさは変わりません。今後もこの美しい公園を守り続け、いつの日か「じゅんさい」が復活する日がきたら嬉しいですね。